

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 95 号
2015年 12月



第 143 回観察会～女神山・里山の陽だまり観察会 信濃満枝

11月の末、紅葉も終わり、吾妻山も白く雪化粧した時期に女神山の観察会?! 何の観察をするのでしょうか? と思いつつ参加しました。すると、登山口の近くにイワテヤマナシの実を発見し、もちろん五感を使って観察しました。甘みは少なかったものの、しっかり和梨の形と味でした。

少し山を登るとクヌギやコナラのドングリ、甘い山栗やきのこなど、動物や人間の食材が豊富にありました。

花のように、真っ赤な5枚のガクの間に宝石のように輝く青い果実のクサギはお洒落でした。パールのような白い玉はスズメウリ、サルトリイバラの実 は赤、ヤマガシユウの実 は黒。

蛾の繭であるヤマカマスは気持ちよく風に揺られてました。

コブシの大木は花芽をたくさん付けて春の準備をしてました。

今回で4度目の観察会の参加になりました。ブラジルでは体験できない四季の移り変わりを間近で観察して改めて自然の美しさに感動しました。この「高山の原生林を守る会」にゆっくり流れる時間と山で頂く「皆様のお弁当」で今回も心も体も幸せになりました。

現段階では、足元に実が落ちてると栗の木、クヌギなど見分けられるのですが、木肌や葉だけでは全部同じ木に見えます。スマレも沢山の種類が有る事はわかりましたが、全部同じに見えます(スママセン)。これから観察力を養って更に山歩きを楽しみたいと思います。



クヌギの果実



ヤマカマス(ウスタビ)

第 143 回女神山・里山陽だまり観察会に参加して

白澤和子

久しぶりの観察会です。小鳥の森駐車場に行くと、若い女性たちがとても多くなっていて華やいています。16年ぶりの女神山。先頭を歩く佐藤守さんに付いて歩き出すと「1時間で歩ける道を5時間かけて歩くのがこの会です。観察するものがないと言われるこの時期に観察会ができるのもこの会です」代表の真心が気持ちよく理解できます。

私は初冬の梢や雲を眺めながら歩くのですが、もう後方では屈んだり、話し込んだりして大分離れてしまいます。守さんは下見で確かに見たという(イワテ)ヤマナシの木を探して登ったり下りたりしていましたが、記憶よりずっと上にその木がありました。皆が落ちているヤマナシを探して大喜び。かじってみる人もいて、「梨の味がする！香りもある！」と大賑わいです。私もやっと見つけてポケットに入れて宮沢賢治のお土産にしました。この小さくて硬い実が熟してドボンと谷川に落ち、いい匂いを放して流れていくんだね。そっと嚙んで見たら微かにあるような味と香り、それはまるでゆらゆらとした青い幻灯の様でした。

山頂を下りても風の冷たさは変わらず、口数も少なくなった頃、風が通らない陽だまりの山道で早めのお昼となりました。セーターを重ねて小さな弁当を広げると、ご馳走が次々と回ってきます。今日のマズイ食堂のウマイは茄子のお焼きです。それからの下り道は、枯葉をザクザクとこぎながら鼻歌も出てしまうほど愉快的な歩きになったのは御馳走を頂戴したお陰です。皆さんありがとうございました。



食べきれない昼食

もちずり学習センターでの総会は明快で簡潔な活動と会計の報告と計画があって、2017年は会の30周年・150回目の観察会・会報100号を迎える嬉しい記念が続く年になると知りました。会員の力を併せて素敵なお祝いをいたしましょう。



クヌギの萌芽更新



イワテヤマナシとキヅタ



イワテヤマナシ



あれなあに

第 142 回小野川不動滝周辺紅葉観察会に参加して

島田 吉子

縁あって、埼玉から参加しました。聞きたいこと、知りたい事がたくさんあり、前日福島に来ました。10月4日は、風がやや冷たかったですが、天気が良く、緑や紅葉の赤、黄が美しいコースを散策し、とてもリフレッシュしました。雑多からの解放感は、寿命が延びる感じがしました。

小野川不動滝駐車場から散策スタート、ミズナラの葉の緑が目に入る。下を見れば大きなどんぐり、つい拾ってしまう。藪の中に踏み分け、コマユミの赤い実を観察、写真を撮る。イタヤカエデ、コハウチワカエデ、ヤマモミジの葉の形や色を比較しながら、守さんの熱心な説明に耳を傾けながら、先に進む。真っ赤に紅葉していたのは山ぶどう。自然の美にうっとり。ブドウの房を持った清子さんから3粒いただき食する。ちょっと甘い。森林の植相が変化することは知っていたが、ミズナラ林がブナ林に変化しつつある、その様を身近かに見て、改めて感激。



小野川不動滝



第 142 回小野川不動滝周辺紅葉観察会

小野川不動滝までにたくさんのシダ、コケを観察することができたが、シダの数種類しか覚えられなかった。シダは孢子囊の形で名前が分かったと聞いたが……。コケはよく観察すると、とてもきれいな形をして、まさに造形美。デザインの参考になりそうだ。見る角度が違えばまた新鮮だ。不動滝は、修行僧が荒修行をしても不思議でない風景だった。水の流れ方、岩肌の色の違い、緑と紅葉と空の色のコントラスト、どれも変化に富みお見事。流石自然の力。

不動滝から先は、すごい難所あり。橋が傾き、木道が倒木に邪魔され先に進めない。道なき道を進み、やっとのことで昼食場所へ着く。やれやれここで一休みと、ゆったり自然を眺めていたら、出るは出るは豪華な食事。山に来て、こんな豪華食事を食べたことがないです。本当に皆さんに感謝、感謝。お腹いっぱいいただき、お腹をさすっていると「何か月ですか？」と声をかけられ、皆大笑い。

ここでゆっくりした後、少々山を登り、広々とした原っぱに出る。今までとは全く違う風景だ。ここで見たシロヤナギは印象的だった。若木と成木があまりに違いすぎてびっくり。人のいないパークゴルフ場は気持ちの良い空間で、のんびりした気分になった。グランデコホテル周辺のブタナのお花畑にもびっくりした。駐車場までの戻り道では、虫こぶの説明を聞き、またまたびっくり。本当に知りませんでした。虫こぶの名前の付け方にも感心した。

皆さんとご一緒でき、本当に楽しかったです。また、守さんの知識の多さにも敬服。豊かな、そして多様な自然を守って行きたい、と強く思う一日でした。また、参加させて下さい。

豊かな自然を満喫できる今の平和と高山の原生林を守る会にあらためて感謝感激の一日でした。



コタニワタリ



コツボゴケ



ハサミツノカメムシの幼虫



シロヤナギハアカコブシ



ミズナラ林の観察



小野川沿いのブナ林は快適でした



味付けは任せて

高山の原生林を守る会 2015 年定期総会報告

2015 年 11 月 29 日(日) 午後 13:00～16:00

福島市もじずり学習センター

1. 2015年活動報告

月 日	内 容	参加人数
11 月 30 日(日)	第 137 回 弁天山・里山陽だまり観察会・総会	12名
3 月 15 日(日)	第 138 回 安達太良・仏沢自然林観察会	14名
4 月 12 日(日)	第 139 回 北霊山・霊山のスプリングエフェメラル観察会	19名
5 月 10 日(日)	第 140 回 斜平山・米沢のスプリングエフェメラル観察会	24名
7 月 4 日(日)	西吾妻登山道誘導ロープ設置ボランティア(NF 米沢と共同)	6名
7 月 10 日(日)	第 141 回 安達太良・烏川自然遊歩道観察会	11名
9 月 19 日(土)	霊山空間線量調査(グラスゴー大学・アラン クレスウエル博士同行)	4名
10 月 4 日(日)	第 142 回 小野川不動滝周辺紅葉観察会	20名
10 月 17 日(土)	西吾妻登山道誘導ロープ取り下げボランティア	5名
11 月 29 日(日)	第 143 回 女神山・里山陽だまり観察会・総会	17名

2. 2015年会計報告(11 月 24 日現在)

収入の部

科目	決算額 (B)
前期繰越金	186,874
会費	26,500
観察会参加費	43,520
保険金繰入金(観察会前払い分)	10,461
雑収	4,933
利息	25
小計	85,439
合計	272,313

支出の部

科目	決算額 (B)
会議費	0
郵送費	14,592
観察会経費	6,714
交通費	15,000
保険代	31,700
雑費	3,000
手数料	648
予備費	0
合計	71,654

平成 27 年決算額

200,659 円(次年度繰越金)

3. 皆勤賞

松井さき子さん

4. 2016年活動計画

(1) 2016自然観察会は、別項へ

(2) 山岳の放射線量調査

2011 年より継続している霊山の放射能汚染調査を実施

調査候補山岳:箕輪山、高山、花塚山、虎捕山、野手上山、高太石山

(3) 西吾妻山城登山道保安全管理に関する検討会の設置にむけた活動

西吾妻山城登山道保安全管理に関する検討会設置について置賜森林管理署、環境省裏磐梯自然保護官事務所、NF 米沢との連携を図る。

5. 役員(* 新任)

代表 佐藤 守

事務局長 奥田 博

会計 佐藤清子*(正) 青柳静子*(副)

会計監査 山口嵩

幹事 佐藤守、佐藤和重、佐藤久美子、小幡仁子、奥田博、青柳静子*、佐藤清子*

会報/HP 佐藤 守

6. その他

(1) 2017年 早春の第150回観察会・30周年記念を兼ね・記念行事

・自然展(コラッセなら1Fと5F 両方借り、展示スペースを分ける)

・記念講演(例 福大・黒沢教授、佐藤守、瀬川強)あるいは自然展トーク

・宿泊お祝い会

・開催時期は会場次第(会場の空きが多いのは2月か)2017年2月目標。3～4月も可。

(2) 2018年 4月会報100号記念特集:全員寄稿依頼は2017年)

鹿狼山から35 ～ミズアオイ～

小幡 仁子

皆さんはミズアオイという植物をご存じでしょうか。私は今年9月にこの植物の存在を初めて知りました。自宅近くの田んぼに、何やら青い花が咲いているのが分かりました。通勤途中の車の中で気が付いたのです。どうして田んぼの稲の間にこんな青い花が咲いているのだらうと思い、車を降りて行って見ました。今までに見たことのない青紫色の美しい花でした。早速写真を撮り、手持ちの図鑑を調べると「ミズアオイ」という名前であることが分かりました。また、ネットで検索したら以下のようなことが分かりました。花の形状もよく説明されていたので、その文章を紹介しておきます。

「ミズアオイ(ミズアオイ科ミズアオイ属)は北海道から九州・朝鮮・ウスリーに分布する1年草。古名をナギといい、葉を食べたという。昔は水田や沼地、池、河川の下流域などに広く生育していたのであろう。現在は除草剤や基盤整備、河川の性質の変化などによって激減しており、環境省RDBでは絶滅危惧Ⅱ類に、岡山県RDBでは絶滅危惧種に指定されている。草丈は20～50cmで柔らかい。葉は5～25cmの葉柄があり、根生葉のものは長い。葉の形は心形でつやがある。9月から10月にかけて、茎を伸ばして先端に花序を形成する。花は青紫色で美しく、直系2.5～3cmで一日花。花被片は6枚で、内花被片は外花被片に比べて幅が広い。雄しべは6本で、その内5本の葯は黄色。残りの1本は下側に垂れて紫色。雌しべは1本で下側に曲がり、紫色の雄しべと反対側の位置にある。1年草の種子は、少なくとも一部は簡単には発芽せず、土の中で埋土集団(シードバンク)を形成することが多い。ミズアオイもそのような性質があり、いったんは姿が見えなくなっても、生育していた場所の土壌を耕したりすると再生することが知られている。沼地のような立地は変化が激しく、ヨシのような背丈の高い植物が繁茂するとミズアオイのような背丈の低い1年草は生育が困難になる。いつしか生育が可能な場所ができることを願って土の中にはたくさんの種子が待機しているに違いない……」

私は、ここに住んで20年近くになります。ずっと同じ道路を通って通勤していたし、このように遠くからでも目に付く青い花に気が付かないはずはありません。この田んぼにミズアオイが咲いたのは今年が初めての事だと思います。というより、ここ20年以上は生育環境に巡り会えずに、土の中で埋土集団(シードバンク)として待機していたということでしょう。

さて、この田んぼに何があったのだらうと考えました。道路脇のこの田んぼは、ずっと田んぼであった気がします。沼地でも湿地でもありませんでした。毎年同じように耕されて今日に至っているような気がしました。今年は田んぼの持ち主が田植えの前に念入りに耕したのかもしれません。想像は色々に広がります。それにしても、ミズアオイが再生した本当の理由を知りたいものだと思います。戦前は田んぼや沼地に普通に見かけたというので、実家の両親なら知っているかもしれないと思い、写真を見せました。するとすぐに「こいつはコナギだ。いや～これにはオレはひどい目にあった～、なんぼ苦しめらっちゃかわがんねえ」との話。ミズアオイは田んぼに繁茂する雑草として嫌われていたのです。父の話では、油断しているとあっという間に田んぼに広がって、退治するのが大変だったということでした。それでも、昭和30年頃に24Dという除草剤が出て、この除草剤がコナギにはうんと効いて、1000倍に薄めて噴霧器でかけると、翌日には黄色くなってとろけてなくなった、それからはだんだんなくなって見なくなってきた、とも話していました。

開拓農民の2代目だった父は、この海岸近くの塩分のある土地を開拓してきました。始めの頃は塩分があるせいかコナギは生えなかったと言っていました。塩分がなくなり、米が取れるようになってから、コナギが出て来るようになったようです。9人兄弟の長男であった父は、少しでも多くの米が収穫できるように懸命に働いてきました。コナギは大敵であったことでしょう。それでも父は、「鉢にでも入れて庭に置きたいような青い美しい花だった」とは言っていました。

ミズアオイは田んぼの端っこ5メートル四方に咲いていました。取り入れの秋にその部分は刈り取りをされないまま残りました。この田んぼでは春には普通に苗が植えられ、稲が育っていました。9月にミズアオイの花が咲くまで成長を続けたのですから、田んぼの持ち主はミズアオイが出て来ることを知らずに田植えをし、ミズアオイが出てきてからは、除草剤をかけることもなく、故意に抜き取らずに残しておいたのではないかと思います。今も、枯れた稲の間にミズアオイの枯れた葉が残っています。これからミズアオイはどうなるのでしょうか。田んぼの雑草ではなく、来年もここで花を咲かせるのでしょうか。来年春になったら田んぼの持ち主に会って(うまく会えるといいが・・)このミズアオイをどのようにしていくのかを聞きたいものです(2015/12/19 記)。



田んぼの稲の中で咲くミズアオイ



青紫色のとても美しい花



ミズアオイが咲いていた部分は刈り取られないで残った



ミズアオイは来年も咲くのだろうか

「大震災が教えてくれたもの」(16) 奥田 博

スベトラーナ・アレクシエービッチ未来の物語「チェルノブイリの祈り」(松本妙子訳・岩波文庫)

スベトラーナ・アレクシエービッチという作家が「チェルノブイリの祈り」という本を、チェルノブイリ原発事故から10年後に発表したことを私は知らなかった。日本語訳が1999年に出たことも、震災後2011年6月に文庫本になったことも知らなかった。今年、ノーベル文学賞にスベトラーナ・アレクシエービッチの「チェルノブイリの祈り」が選ばれて初めて知ったのだった。チェルノブイリ原発が爆発したのは、1986年4月26日午前1時23分58秒のこと。今年4月で30年が経つ。

この本は、チェルノブイリ周辺に住んでいた人々の様々な声の聞き取り集なのだ。事故当時の模様は断片的にしか報道されていない。当時の共産党体制下では、ヒタ隠しにされ、抹殺され、フィルムは燃やされ、紙に書いたものまで燃やされていた。人々の口を封じ、また人々は悍ましい記憶を思い出したくないために口を閉じた。そんな状況下で、著者の彼女は、ひたすら人々の話を聞き、あるいは重い口を開かせ話させた。

これは文学ではないという人もいるだろう。事故から10年という時間を経ても、人々の口から語られる言葉は重く悲しく、心を打つ。私がフクシマ人だからではなく、多くの人々が心を打たれるに違いない。残念なのは、この本が警鐘した悲劇をまた繰り返したこと。そして為政者は、事故からたった4年で原発を再稼働したこと。

読み進めても、進まない箇所が現れて、ページをめくれない時間が、何度かあった。つい4年前にあった事例を思い出してしまうからだ。

『学者も技師も軍人も誰一人として罪を認めようとしません』=>フクシマでも、学者は「何でもない」といい、東電は責任を取らず、推進役だった政府や役人は本質に迫ろうとしない。

『線量計を持った軍人にばあさんが「うちはどうか？」と問うと「軍事秘密なんだよ」と答え「あんたのところは正常だよ」とうそぶく』=>事故直後、何も知らされない飯館・長泥で放射能測定車の周りを子供が興味深げに、うろうろしている映像を思い出す。

『チェルノブイリは第三次世界大戦なのです。(中略)国家というものは自分の問題や政府を守ることだけに専念し、人間は歴史のなかに消えていくのです。革命や第二次世界大戦の中に一人ひとりの人間が消えてしまったように。だからこそ、個々の人間の記憶を残すことが大切です』

『ここでは過去の体験はまったく役に立たない。チェルノブイリ後、私たちが住んでいるのは別の世界です。前の世界はなくなりました。でも人はこのことを考えたがらない。このことについて一度も深く考えていたことがないからです。不意打ちを食らったのです』

紙面がなくなった。私には表現力が無いが、一読をすすめる一冊だ。重い重すぎる一冊だが、特にフクシマ人には心に響く一冊、ノーベル平和賞がふさわしい一冊に思えた。

最後に翻訳の松本妙子が文庫版「訳者あとがき」(発行はフクシマ事故後2011年6月16日)で終わります。

『わたしたちはチェルノブイリからなにを学んできたのだろう。そして、いまカタカナで書かれることになった「フクシマ」から、次の世代のためになにを学ぼうとしているのだろう。人間が他者を思いやる心を信じたい、人類の良心と叡智が信じるに値するものであってほしいと、心から強く願う』



本書の著者アレクシエービッチ氏(1948-)はベラルーシに住む作家。日本語訳になった彼女の作品は『チェルノブイリの祈り』に加えて『アフガン帰還兵の証言』(日本経済新聞)、独ソ戦の証言集『戦争は女の顔をしていない』『ボタン穴から見た戦争-白ロシアの子どもたちのみた戦争』『死に魅入られた人びと』(群像社)の5冊。戦争が民衆をいかに傷つけたかを克明に描き出している。(肖像、ウィキペディアより)

ホオノキ (*Magnolia obovata* モクレン科モクレン属)

クリ・コナラ林からブナ林に植生する落葉広葉樹。日本固有種である。吾妻安達太良に植生するモクレン科の樹木にはこの他にタムシバとコブシがあるが、ホオノキのみ葉が完全に成長してから開花する。また、ホオノキは他の植物の発芽を抑制する成分を分泌するアレロパシー作用が強いために、その樹冠下は下草層の発達が悪い。

葉は互生である。新梢の先端に 10 葉前後の葉がらせん状に着生する。葉は革質で厚く日本に自生する樹木では最も大型である。葉形は倒卵状長楕円形であり、葉縁は鋸歯が無く滑らかで緩やかに波打つ。種小名は「倒卵形の」を意味し、葉形に由来している。葉身は中肋から 20 を超える並行脈が走る。葉裏は白みを帯び軟毛が散生する。ホオノキの葉は芳香成分である精油成分(エッセンシャルオイル)を有する。

花は頂性である。ガクと花卉の区別が不明であり、花びら状のものは花被片と呼ばれる。花被片は 3 数性を示し、9~12 枚の花被片がらせん状に着生する。花卉の数が多いことやらせん状に着生することは被子植物の中では古生的な様式とされている。雌しべは尖った帯赤色の柱頭が集合し、毛筆の筆先を連想させる。その基部を多数の先の尖った短冊状の雄しべが取り囲んでいる。黄白色の部分は葯でその基部の赤い部分が花糸に当たる。雌しべは先熟で、開花直後に柱頭が反転する。花は一旦閉じ、翌日雄しべが開葯する。花からは甘い香りが放たれる。果実は種子 2 個を包んだ赤い袋果が集合し、棍棒状を呈する。熟すと破袋して種子が垂れ下がる。自家結実した種子は殆ど発芽しない。

子供の頃、近所の年上の遊び仲間と裏山の探検に出かけた。そこがどこの山だったのか今では曖昧であるが、ウシガエルと紐で網状に包まれたボーレスハムの様な赤い物体が記憶に残っている。その物体の香りは、ハムの匂いに似ていた。高山の原生林を守る会の観察会で、ほぼ 20 年ぶりにその物体の正体が判明した。以後、ホオノキの果実に遭遇するたびに子供の頃のささやかな探検を思い出す。



ウワミズザクラ (*Prunus grayana* バラ科サクラ属)

クリ・コナラ林からブナ林の沢沿いの斜面や谷筋に植生する落葉広葉樹。カスミザクラ、オオヤマザクラ、オクチョウジザクラ等の吾妻・安達太良連峰に自生する他のサクラ属の花と異なり葉が完全に成長してから開花する。また葉や樹皮にはクマリンと言う抗菌性の強い芳香物質が多く含まれる。イヌザクラ、シウリザクラ等と併せてウワミズザクラ亜属に分類される。

葉は互生。葉形は長楕円形で先端は尖る。葉縁は細かい鋸歯がある。葉身最下部の鋸歯に蜜腺を形成する。

花は頂(腋?)性。旧枝の各節から数枚の葉を着生した新梢の先端に多数の白い小花で構成された総状花序を形成する。花卉は 5 枚で緩く縮れる。雌しべの花柱は黄緑色で柱頭は黄白色である。柱頭の位置は雄しべの葯より高い。雄しべは 1 花当たり 30 本以上あり、葯は黄白色である。多数の雄しべが試験管の洗浄ブラシを連想させる。ガク筒は緑色で花卉の白と併せて清涼感を醸し出す。イヌザクラの花柄には葉は着生しない。

ウワミズザクラの枝には生長枝と脱落枝の 2 つのタイプがある。生長枝は旧枝の先端付近から伸長し、樹冠の骨格を構成する長枝としての機能を持つ。脱落枝は旧枝上の各節から春一斉に伸長し、秋に葉とともに茎も脱落する当年限りの枝である。そして翌春また同じ節から別の芽が伸長し、多くはその先端に花を咲かせる。脱落枝は当年の新梢の大部分を占め、数年間にわたって伸長と脱落を繰り返す。これは落枝現象と呼ばれるウワミズザクラ類の特性である。落枝現象はメタセコイア、ラクウショウやマツなどの針葉樹で認められている。広葉樹ではウワミズザクラ類以外ではクスノキ等で認められるが極めて少ない。落枝現象の生理生態的意義は解明されていない。その多くが先端に花序を有することから、脱落枝全体をナシなどの花叢と相同器官と見なすことで、脱落枝を樹冠体制上の繁殖機能を担う短枝の一変形様式と解釈することができる。

ウワミズザクラの花が咲きそろうと山麓の水田には水が張られ、果樹園や畑地でも本格的な農作業の季節となる。



第 144 回自然観察会案内：安達太良・仏沢冬のブナ林観察会

日時：2016 年 2 月 28 日（日）7：30～15：30

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7:30 参加定員 20 名

内容 箕輪山と鉄山の間の仏沢尾根に広がる冬のブナ林を散策します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、手袋（軍手複数）、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、冬季歩行用具（スノーシュー、カンジキ、スキー）

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（500 円）

申し込み：2 月 27 日（土）まで佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします）。

2016 年「高山の原生林を守る会」自然観察会計画

回数	期日	曜日	候補地	テーマ	担当者
第 144 回	2 月 28 日	日	安達太良	仏沢ブナ林雪上観察	佐藤清
第 145 回	4 月 10 日	日	塩手山	スプリングエフェメラル観察と大防波堤工事見学	小幡
第 146 回	5 月 8 日	日	斜平山	米沢のスプリングエフェメラル	佐藤守
第 147 回	7 月 10 日	日	高山	夏の山岳植物観察（幕川温泉-鳥子平-高山周回）	佐藤久
第 148 回	10 月 2 日	日	大滝沢	秋の植物観察と芋煮会（滑川温泉から大滝展望台）	佐藤和
第 149 回	11 月 27 日	日	高子二十境	里山観察と総会	奥田
第 150 回	3 月 26 日	日	高山山麓	仁田沼の雪上観察【または梅森】	

山形と共同の西吾妻の登山道保全ボランティア

月日	曜日	山域	作業内容	備考
6 月 18 日	（土）	天狗岩～西大巔	誘導ロープ設置	NF 米沢との共同開催
6 月 19 日	（日）	（予備日）		
10 月 15 日	（土）	天狗岩～西大巔	誘導ロープ取下	NF 米沢との共同開催
10 月 16 日	（日）	（予備日）		

・ロープ設置に関しては、天元台から NF 米沢と入山。ロープ取り下げは、デコ平から入山します。

祝 第 300 回カタクリの会自然観察会

2015 年 12 月 6 日（日）にカタクリの会観察会が 300 回を迎えました。高山の原生林を守る会からは 7 名が参加しました。

前夜の懇親会には多くの方々が参集され瀬川強さん、陽子さんご夫妻との思い出話に花を咲かせました。

今回のカタクリの会観察会は地元「岩手日報社」が 2 面の特集記事を組んだのを始め、観察会にはテレビ局等多くのマスコミ関係者が観察会の様子を取材しました。

カタクリの会は 1990 年 12 月に結成され、翌 1991 年 1 月に第 1 回観察会が開催されました。参加者は 5 名だったそうです。以来 25 年間毎月休むことなく観察会を重ねてこられました。高山の原生林を守る会の観察会はカタクリの会に習って始められたものでした。十数年に亘って高山の原生林を守る会のメンバーが西和賀を訪問していますが、その都度、瀬川夫妻には暖かく迎え入れていただき、西和賀にはいい思い出が沢山溢れています。感謝の気持ちも込めて心より祝福いたしたいと思います。2016 年度は、新たな構想での観察会を予定されているそうです、観察会の計画が届きましたらお知らせいたします。



カタクリの会 300 回観察会にて

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第95号 2015年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・小幡